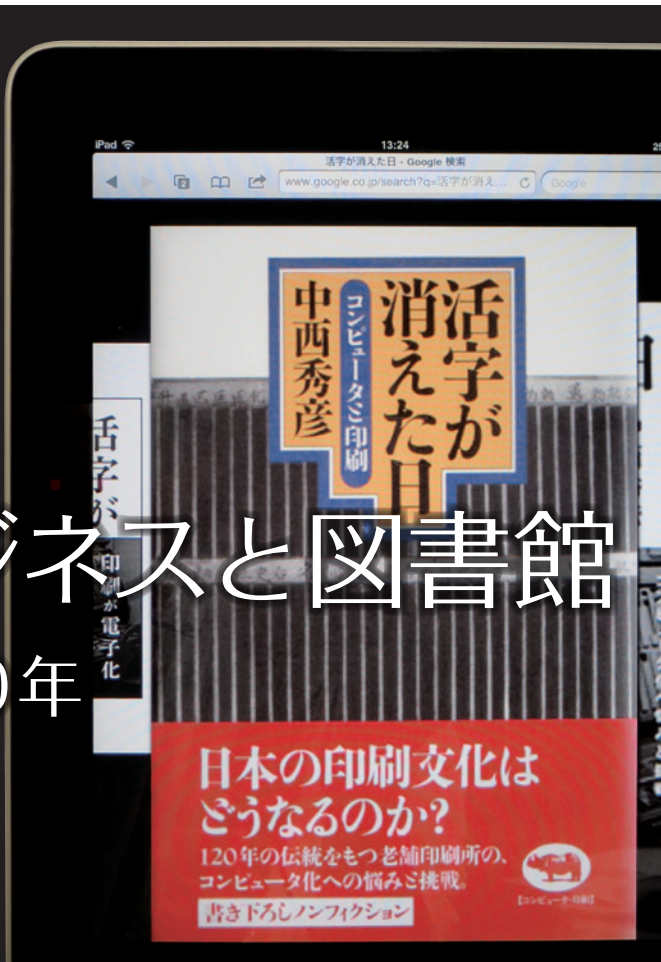


学術電子出版ビジネスと図書館 ～『活字が消えた日』から20年



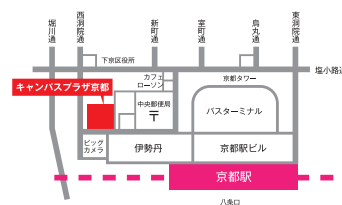
第1部 講演／中西 秀彦 氏 (中西印刷株式会社・専務取締役)
第2部 ディスカッション

予約不要・入場無料

日時 **2013年7月25日**[木] 18:30 - 20:00

場所 **キャンパスプラザ京都 6階第1講習室 (定員48名)**

〒600-8216 京都府京都市下西区西洞院通塩小路下る東塩小路町 939 TEL: 075-353-9111



【第一部 講演】近代は書籍の流通とともに始まったが、それはとりもなおさず印刷技術の発展によるところが大きい。グーテンベルグにはじまる活版印刷技法は500年間ほとんどその姿を変えることがなかったが、1980年代、急速にコンピュータによる電子組版に置き換わる。そうした変化がもっとも極端なカタチであらわれた学術出版を例にとり、電子組版の普及の様相とそれによる学術研究の変容を明らかにする。

1994年6月刊行された『活字が消えた日』は出版界だけではなく、当時の社会に大きな衝撃を与えた。著者の中西秀彦氏にそれから20年を語っていただく。

中西秀彦氏 プロフィール：

1956年京都府生。1980年京都大学文学部卒業。中西印刷株式会社専務取締役。博士（創造都市）。大谷大学非常勤講師。著書に「活字が消えた日」（晶文社 1994年、松香堂書店より2011年復刊）、「印刷はどこへ行くのか」（晶文社 1997年）、「我、電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す」（印刷学会出版部 2010年）など多数。最新刊は「学術出版の技術変遷論考－活版からDTPまで－」（印刷学会出版部、2011年）

【第二部 ディスカッション】立命館大学図書館ではディスカバリーサービスを導入し、電子資料の横断的検索ができる環境を利用者に提供してきた。また、文学部の湯浅ゼミでは図書館と連携し電子書籍を使った授業も実施している。このような図書館サービスと今日の電子出版ビジネスの関係を整理し、これからの学術コミュニケーションの方向性と具体的な授業への利活用を検討する。

*立命館大学大学院 文学研究科 行動文化情報学専攻 文化情報学専修は2014年度設置予定です。